

『東京センチネルバース -蛇恋は不夜城に燃ゆ-』

著：鴫 六連

ill：羽純ハナ

「よー、オロチ」

チッと大きく舌を打つ。白慈を呼び止めたのは、客たちには見えないリカオンを連れた、7 A センチネルの天原蓮司だった。

茶髪に派手なメッシュを入れ、パーカーの上に【PCB】のロゴが入ったスタジアムジャンパーを重ねた天原は、アングラな場所での活動を得手とする。両耳でじゃらじゃら揺れるリングピアスは制御アクセサリではない。

「お子ちゃまのおまえがクラブで仕事なんて珍しいやん」

二か月前に十九歳になったばかりの白慈を茶化してくる。無駄に苛立ち、無駄にノイズが増える。チャラチャラしたいけど好かない二十二歳の男は、タトゥーがびっしり施された左手をわざとらしく顎に当てた。

「そうか、オロチがおるってことは、タワーで話題沸騰の7 Sガイド・宗玄くんもここにおるってことやね。保護者みたいなもんかあ」

こめかみの血管が切れる錯覚に陥ったが、安っぽい挑発を無視する。センチネルと言葉を交わすのは苦痛だった。しかし天原はなおも絡んでくる。

「宗玄くん探そーっと！ 一緒に飲みたい、酒めっちゃ強そうやん」

「リカオンっ、てめえいいかげんにしやがれ！ 干渉するなら今ここで絞めるぞっ」

「オロチくんは相変わらず自意識過剰やなあ。——俺はおまえにもおまえの仕事にも興味ないわ。そっちこそ俺の仕事の邪魔すんなよ」

ほんじゃあな、と天原は手をひらひらさせ、先を行くリカオンを追ってメインホールの人波へ溶け込んでいった。

いつもの単身の仕事なら、ほかのセンチネルと接触しなくて済むのに。仕事のペースを乱されるのが最も腹が立つ。

もともと気乗りしていなかった。早々に事案を片づけるため、店内の奥へ一気に進む。

美馬が9クラスのセンチネルをナイトクラブに単身潜入させることはない。宗玄の言う通り、ここが白慈たちにとって最も過酷な環境だからだ。

ドンッ…、ドンッ…という聴覚と触覚を脅かす重低音。赤や紫の光が乱反射する。煙草とアルコールと香水が混ざった悪臭。

先ほど酷使した聴覚が最初に狂い始め、ほかの感覚も異常をきたす。次々と発生するノイズに耐えながら壁を這い上り、吹き抜けの天井からメインホールを見渡した。

どのような場所においても目立つ、プラチナブロンドと百九十センチ近くある逞しい長躯。

白金色のまつげと薄紫の瞳を持つ端正な顔。

これらは相当、人を惹きつけるらしい。

宗玄は多くの男女に囲まれていた。そしてその状況に慣れきっているようだった。

デコルテを見せるワンピースを着た女性が抱きついて、拒まない。いつの間にか隣に立つ天原とも親しげに言葉を交わす。肩を組んでくる7 Aセンチネルの背に腕をまわし、さりげなくノイズを消していた。満面に笑みを浮かべる天原の「すげーっ、宗玄くんサイコー！」という声を、聴覚がとらえた。

「……………」

現場でボディ以外のセンチネルをケアする宗玄の無神経さに、苛立つ。

——放っとけばいい。

苛立ちを覚えているのは白慈ではない、センチネルの本能だ。

——うぜえ。

こういうくだらないことに振りまわされるから、長く組むのは嫌だった。

明日もボディ解消の指示がなければ、白慈のほうから申し出る。そうしてまた単身の仕事を中心に活動する。時折、東京局へ来る紅丸やほかのフリーランスの7 Aガイドたちにケアしてもらう。

すべてこれまで通りに戻すと決めた。

体内で暴れるノイズが鬱陶しい。嗅覚と味覚を駆使して、幾層にも重なる悪臭を掻き分け、麻薬の臭いを追う。強いライトを浴びて踊り、酒を飲み、身体を密着させて会話する数多の客の中に、違法薬物の臭いを纏う者は十数人いた。

最も濃い臭いを放つ男を透視する。どのようにして手荷物チェックをすり抜けたのか、大胆にも首から下げたスマートフォンショルダーに、小分けにした麻薬を詰め込んでいる。今夜、客に手渡すのだろう。

密売人を見つけた白慈は、天井の照明機器を伝って宗玄の頭上まで移動し、約十メートルある胴体を垂らす。

ぬうっと鎌首をもたげ、顔の真横で言った。

「おい。遊び惚けてんなら俺だけでやるぞ」

三人の女性と談笑する宗玄は、薄紫の瞳だけを寄越し、思念波で返事をした。

——まさか。ずっとおまえの動きを見ていた。ターゲットは特定できたか？ なら接触してみる。

目顔で「そいつらだ」と指し示す。宗玄が振り向くのと、ふたりの男女が声をかけてくるのは同時だった。

「ヘーイ、グッドイブニング、お兄さん日本語わかる？ ダメっばいかなー？」

「ああ、わかる。日本で暮らして長いんだ」

甲高い声で「すごおい、ペラペラじゃん！」と言う女からも合成麻薬の臭いがしている。

「初めて会うよな？ 前からここ来てた？」

「この店は今夜が初めてだよ。好みの雰囲気だし朝まで楽しもうと思ってる」

「いいね！ 奥の部屋、取ってるから来なよ、あとで友達も集まってくるし」

「ありがとう。嬉しいな。今夜来てよかった」

男が誘ったのか宗玄が誘わせたのか、白慈にはわからなかった。

密売人は派手でもなく厳つくもない、拍子抜けするほど普通の青年だが、足許を透視する。

「ドラッグはスマホショルダーの中だ。俺が始めたらすぐうしろ下がれ、ショートブーツに護身用ナイフ隠してる」

宗玄は密売人の男と話しながら、白慈の言葉にうなずいた。

個室のドアを開けた女、宗玄、男の順に入る。

「テキトーに座って。今、新しい酒を——、…ぐらッ」

獣身化を解いた白慈は男の顔面に膝を叩き込む。ゴキッと鼻骨の砕ける感触がした。

宗玄は後方へ下がってスマートフォンをタワーへつなぎ、密売人確保の報告を入れる。

「き、ア」

男が卒倒するよりも、金切り声があがるよりも早く、白慈は跳躍して女の背後へまわり、口を塞ぐ。両脚をガツと女の腰に巻きつけ、腕で細首を絞める。

女は白慈の重さに耐えられず頹れた。腕に力を込めながら耳許でささやく。

「この男と手を切れ。ドラッグともな。俺はめちゃくちゃ鼻が利くんだ、おまえの匂いを憶えたからいつでも見つけられる。次もクスリの臭いさせてたら容赦しねえ。俺がおまえを警察に突き出す。よく憶えとけよ」

涙とよだれを垂らして失神した女を解放する。

倒れた男の顔を踏んだ拍子に、視界がぐにやりと大きく歪んだ。もっと、徹底的に痛めつけなくてはならないのに。

「……くそ」

ノイズのせいで息が切れ、汗が噴き出す。ふらつく身体を支えるために壁へ手を伸ばしたとき、シルバーのアクセサリをつけた太い腕が腰にまわってきた。

「そうだ、中二階のVIPルームに男女ひとりずつ。警察の到着は待たない、センチネルの五感に乱れが生じているため今すぐ現場を離れる。以上だ」

宗玄はスマートフォンをデニムのポケットに入れ、流れるような動きで白慈を横抱きにした。個室のドアを背で押して閉める。

「ばかやろう、おろせ！」

「騒ぐと目立つぞ、せっかく誰にも気づかれてないベストな状況なのに」

大音量のダンスナンバーが響く中、宗玄はエントランスへの最短ルートを進む。

ナイトクラブを出たところで、ナダを背に乗せたパーディシャが待っていた。PCBが経営するホテルへ向かってしなやかに走り出す。

歓楽街を歩く人々からの好奇の視線を、宗玄はいっさい気にしない。

ホテルのフロントマネージャーは5 B以下の異能者で、状況を瞬時に察知し、センチネル専用の部屋のカードキーを宗玄に渡した。

「おろせって言ってんだ！」

「ばか、エレベーターの中で暴れるな、もう着く」

十七階のセンチネル専用の部屋に入り、ベッドに落とされる。ノイズと汗にまみれた身体を起こすことができず、白慈はシーツに深く沈んだ。

「やはり常にケアしながら仕事を進めるべきだった。そのためのバディなのに。すぐノイズを除去する」

不調をきたしたセンチネルの扱いに慣れている宗玄は、手早くスニーカーと靴下を脱がせ、制服のパンツと下着を剥ぎ、サイドテーブルの引き出しからローションを取った。

「く……、そ」

陰茎を体内に入れるのは耐えがたい屈辱だが、十分以内に終わる。キスや相互口淫のような手ぬるいケアを何時間もつづけられるよりましだ。そう自分に言い聞かせ、声が漏れないよう唇を噛む。

白慈の後孔にローションを塗り込んだ宗玄は、自身の手で刺激を与えて勃起させる。機械的な動きが、これが単なるノイズ除去行為であることを示している。それでいい。挿入時の圧迫感をなんとか凌いだ白慈は、抽挿を甘んじて受け入れた。

「ふ、……っ」

大量の精液が腹の奥に撒かれる。ノイズが消える快感には抗えず、目を閉じて喉を反らし、下肢を震わせた。

まぶたを開く。ケアが終わってもつながったままの宗玄を、赤い瞳で睨みつける。

「いつまで突っ込んでんだ、さっさと抜け」

「ノイズの量が多すぎる。俺がケアしているのに、これほど溜まるのはおかしい。特に聴覚……プライベートで能力を酷使しているのか？ 自滅行為だ、なぜそんなことをする？」

「俺がおまえに話すと思ってんのか？ めでたい野郎だ」

鼻で笑った途端、宗玄はこれまでにない強い苛立ちを見せた。

「懐かないな……。特別優しくしてやってるのに……」

低い声でつぶやいて、顎をつかんでくる。頬に指が食い込む。

「すべてのセンチネルが俺を求め、俺に縋り、ねだってくる。ねだってみろ、おまえも」

傲慢を極めた挑発に白慈も苛つき、顎をつかむ手に蛇の牙を立てた。

「ッ……」

「うぜえんだよ、おまえ。見境なしに愛嬌もケア能力も振り撒きやがって。すべてのセンチネルだと？ 自惚れんのも大概にしやがれ」

「ケア能力？」

怒りに任せて口に出してしまったと後悔しても遅い。少し考えた宗玄は、ナイトクラブで天原にケアを施したことを思い出したらしく、「ああ。あれか」と言った。

「悪い。バディ以外のセンチネルのノイズを消すのは、よくない癖だという自覚がある。次から気をつけるよ」

「次？ あるわけねえだろ。バディは終わ、り……、——っ！」

ふいに硬さを保った陰莖で突かれ、身体が強張る。

「白慈はセックスに慣れてないんだな。意外だった」

機嫌を直した宗玄に、ふっと笑われて、羞恥に頭が熱くなる。

白慈がガイドを抱いてきたのはノイズを除去して命を維持するためであり、性的快楽はただの付属に過ぎなかった。それでいいと思っているのに。

「センチネルはノイズ消滅時の快感に溺れやすいからな。ケアなしのセックスも悦いことを教えてやろう」

「は？ おまえいいかげんにしねえと本当に殺——」

ふしだらな笑みを浮かべる宗玄が、ずるんと陰莖を抜き、ニットとデニムパンツを脱ぎ捨てた。白慈は身体を返してうつ伏せになる。肘鉄を打ち込んだつもりが、「さすがに同じ手は食わないな」と笑って阻まれた。

獣身化したくても、ナダはパーディシャの獣毛に埋もれて熟睡している。

「なに、しゃがる！」

「背面座位は初めてか？ 奥まで嵌められるから俺は好きだ。白慈も気に入る」

Tシャツを脱がされ裸体を起こされて、膝裏に手が差し込まれた。脚を大きく開かれる。

はしたない格好を強いられた白慈の後孔に、抜けたばかりの性器があてがわれる。

「や、めっ、……あぁっ」

鍛えられた下腹と白慈の尻が密着するまで、長い陰莖をずぶずぶと呑み込まされた。

一気に増した圧迫感と、熱を持ったペニスの生々しさに、はっ、はっ、と息が切れる。

「下から突き上げられたことは？」

宗玄は訊きながら腰を振る。長いストロークで何度も出し入れをして、白慈の孔に生殖器の太さや感触を教え込み、速い抽挿に変えた。

体格差では敵わない。淡い褐色の巨躯の上で細身が軽々と跳ねる。

「あっ、あっ、あっ」

ぱん、ぱん、と濡れた肌がぶつかるのに合わせて声が小刻みに漏れる。大きく開脚させられたその真ん中で、硬くなった屹立が振りまわされる。

「あ！ 出、っ……、——んんっ」

張り出した亀頭で前立腺を容赦なく捏ねられ、精液をビュルツと勢いよく射出した。

自身でコントロールできなかった射精に、白濁をとろりとこぼす莖がわななく。

「ふざ……けんな……、抜け……」

「まだだ。白慈はもっと悦くなれる」

白い粘液にまみれた先端に、宗玄の手が被さってくる。くちゅくちゅと音を立てて揉みしだかれる。

「ひ、い……」

つづけて茎を激しく扱かれた。先端の小孔は赤く熟れ、開ききっている。

びくびくと痙攣する下腹部の奥に、尿意に似た淫らな感触がじわりと湧いた。

「ああっ？ なに……やめ、ろっ」

「ほら、気持ちいい。気持ちよくて漏らしそうだ」

耳孔に吹き込まれた言葉に恥辱感を掻き立てられる。

屹立を扱く宗玄の手は止まらない。射精とは異なる、背徳めいた未知の感覚が性器の中の管を一気にせり上がってくる。

「やめ、っ……、あ、いや、だ、——あ、あああ……っ」

ぷしゅうっ、と小孔が透明の体液を噴いた。精液でも尿でもないそれはしよろしよると漏れつづけ、宗玄の手をしたたかに濡らした。

「あ……、ああ……」

広げられたままの脚がぶるぶる震える。

堪えようとしたのがいけなかったのだろうか。凄まじい解放感と快感に頭が真っ白になり、太いペニスを啜えた粘膜が信じられないほどいやらしくうねる。

「締まって、きつくなった……、っ」

宗玄が忙しい動きで腰を突き上げた。白慈の尻を打ち、精液をびゅるびゅると放つ。

「あ……、は……腹、が」

ノイズはないのに、怖くなるまでに大量に注ぎ込まれた。

くらりと眩暈がする。力の抜けきった身体を預けるしかなかった。筋肉のついた胸板は興奮に上下している。宗玄が掠れた声でささやく。

「やはり身体の相性は最高にいい……。抱き潰したくなったのは久しぶりだ」

煽られたところで、つながりをほどく力も言い返す気力も残っていなかった。

宗玄が、粘液と汗にまみれたぐずぐずの結合部をいじりながら、耳に口づけてくる。

「気持ちいいな、白慈……」

「う、あっ……！ も、う——」

もう、感じたくない。

それなのにまた律動が始まる。無理やり追い上げられる。

何度目かわからない絶頂の体液を放ったのち、白慈は失神するように眠りの淵へ落ちた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>